

ドゥニ・チャンド・ラナ研究員（インド）



私はインドから来ましたドゥニ・チャンド・ラナと申します。インド北部に位置するヒマーチュラ・プラデシュ州で、行政事務局の局次長として働いています。私は 1999 年からインド政府職員として、防災に関わる様々な部署で業務を行ってきました。近年では、UNDP と連携した防災プログラムを 2009 年から 2012 年まで担当し、多くの防災関係者向けトレーニングを実施し、IEC 教材の開発、防災の基本政策や実施手順の整備支援を行ってきました。

インドは、地形及び気候学的な観点から、世界的に見ても自然災害が多発している国のひとつです。アラビア海およびベンガル湾から発生する暴風やヒマラヤ山脈での活発な地殻活動による地震が挙げられます。地震においては、国土の 58.7%は中～高い規模の地震が発生しやすい地域となっています。その他にヒマラヤ山脈は比較的新しい地層の山脈であり、絶えず地質的に変化していることから、地滑りが起こりやすくなっています。また、国土の 12%が洪水、そして耕作地の 68%が干ばつの被害を受けやすく、国の西部にあるタール砂漠、中部のデカン高原は深刻な水不足により繰り返し干ばつが発生しています。そして、津波に対する脅威も増加しています。インドの海岸線の長さは約 7,600km にもなるため、サイクロンによる影響を頻繁に受けます。インド国内の自然災害による年間損害額は GDP の 2～3%にも達し、さらに、毎年多くの貴重な人命も失われています。

近年では、インドにおいて総合的防災対策の制度化に着手されるようになりました。インドにおける既存の緊急対応は、警察、消防、医療、救急車、災害に対してそれぞれの緊急電話番号がありますが、人々は混乱しているのが現状です。また緊急対応には複数の機関が関係し、既存のシステムでは、関係機関間での効果的な連携やサービスの統合ができていません。そのため、多くの無駄を生みだしています。その他にも早期警報の脆弱なコミュニティや対応機関への効果的で効率的な情報伝達システムやネットワークがないなどの問題を抱えています。そのため多くの人命が失われる結果となっています。

今回機会を頂いた、ADRC での客員研究員プログラムでは、日本における緊急対応の現状と国際的優良事例の研究を行い、インドにおいて上記課題を解決するような、災害時における最適ナリソースの利用や効果的な緊急対応のためのモデルを提案したいと思っています。

日本でのこれまでの滞在期間には、国際会議への参加、コミュニティ防災訓練の見学、阪神・淡路大震災のメモリアル事業への参加等すでに多くの活動に触れることができました。特に過去の災害の記憶の継承や、新しい世代への防災教育への取り組みに感銘を受けています。

最後に、この客員研究員プログラムの機会を頂いたヒマーチュラ・プラデシュ州及びインド政府、そして ADRC に感謝を申し上げます。このプログラムで得た経験や知識をヒマーチュラ・プラデシュ州及び自国の防災に生かしたいと思います。